

ロッカーの扉を閉めて、ネームプレートを取り外す。自分の荷物をまとめたバッグにそれを入れようかとも思ったけれど、すぐ近くにゴミ箱があったので、そこに丸めて放り投げた。

代わりに日吉の名前が入るのか——宍戸の名前が入るのか、滝にとってはもうどうでもいいことだ。試合の直後こそ、それなりにシヨックだったけれど、今はもう頭も冷えて落ち着いている。自分でも気味が悪いくらいに。

テニス部では、こう言うことは珍しくない。負けたレギュラーがこの部屋を去って行く。滝がここに入った後も何度かそう言うことがあった。一つ上の先輩が樺地に負けて外されたし、同級生の一人は、やっとレギュラーになれたかと思ったら早々に小さな大会で負けて去って行った。それに宍戸も、ついこの前ここから荷物をまとめて出て行ったばかりだった。まあ、荷物とは言っても、滝や宍戸などは少ない方である。ずっと前からここを使っている芥川は、クラスメイトなどから貰ったお菓子やぬいぐるみなどが溢れそうなくらいで——実際によく溢れていて、テーブルの上に置いてあるのを何度か跡部に怒られている。向日も借りた漫画や中途半端に残ったグリップテーブルの箱などが雑多に入れられている。忍足は跡部の次に古参の割には、ロッカーの中身はシンプルなようだ。跡部も似たような感じだが、彼の場合はこの部室自体が彼の私物みたいなものだから、少し意味合いが違う。

かもしれない。

バッグを肩に担ぎ、部室の扉を開けようとする。が、彼が開けるより先に外から勢よく開いて向日と忍足が入って来た。さつきまで後ろの忍足を振り返りながら賑やかに喋っていた向日が目の前の滝の存在に気付き、ピタリと口を噤む。そしてみるみるうちに気まぐすような表情。この前宍戸がレギュラー落ちした時は「馬鹿なヤツだぜ」と言つて宍戸と掴み合いの喧嘩になり掛けていたが、相手が滝だと勝手が違うらしい。しかし滝自身、自分を馬鹿なヤツだと思う。必死の形相をした宍戸から挑まれた試合に、余裕ぶつて受けて立つたら、このざまだ。

宍戸が狙つて来たのが自分と言うことに、腹が立つと言えば腹が立つ。しかし冷静に考えれば、ひどく妥当な判断だ。跡部や忍足は論外——とは言え、実は跡部には何度か試合を挑んだのだが、どれも惨敗だった——芥川に対する勝率は三割に満たない。樺地とも相性が悪く似たような勝率だったし、鳳はその勝率以前に今まで特訓に付き合つて貰った相手だから、流石に蹴落とす対象には出来なかつたのだろう。残るは向日と滝だ。恐らく確率的にはどちらとやっても似たようなものだっただろうが、そこで滝を選んだのは、彼がシングル狙いだったからなのかもしれない。

今までの滝と宍戸の対戦成績は五分。いや、最近ほんの少し滝の方が上回っていたかもしれない。確かに宍戸はスピードがあるが緻密さに欠ける。勝ち急ぐとミスを連発する。その弱点を上手くつけければ、勝てない相手ではなかった。だからこそ滝はあの試合を受け

た。もつとも、どちらにしろあの状況では受けて立たない訳には行かなかつただろう。

余裕で勝てるとはもちろん思っていないかつた。鳳と何か特訓をしているのは滝だつて知っていた。しかし着実に自分のテニスが出来れば——そう思っていたが、その「自分のテニス」が全く出来ている気がしなかつた。相変わらずの緻密さに欠けるプレイだつた。が、そんなものが氣にならない程にスピードも攻撃力も上がつていた。

「お疲れ」

何と声を掛けていいのか分からずそこに立ち尽くす向日に、滝の方からそう声を掛けてそのまま部屋を出て行くこうとする。後ろの忍足は一瞬眉間に皺を寄せたけれど、恐らくどんな言葉も掛けても白々しくなるだけだと分かっているのだろう、部屋の扉を閉める滝に背中を向けたまま「お疲れさん」と一言。小さい笑いとため息の交じつた息を吐き出し、滝が廊下を歩き始めた時、さつき閉めたばかりの扉がバタンと大きな音を立てて思い切り開かれた。そして中から向日が飛び出して来る。

「滝！……やめんじやねえぞ！」

滝が振り返れば、歯を食いしばつて、まるで睨むかのように強い目を向けて来る向日の姿。彼に言われるまで、そう言う選択肢があることを忘れていた。確かに、この関東大会を目前に控えた今、レギュラーを外されてしまつてはあまり残っている意味はないのかもしれない。滝はそのまま答えることをせず、その場を後にした。

*